

■ PCN だより**PCN Volume 63, Number 6 の紹介 (その 1)**

PCN volume 63, number 6 には、外国からの投稿として、Regular Article 4 本、Short Communication 1 本が掲載されている。今回はこれらの内容を紹介する。

PCN はオンライン査読体制がスタートしてから格段に外国からの投稿が増加し、精神医学領域におけるアジアのハブジャーナルとしての地位が確立されてきたように思われる。本年度の掲載論文数は PCN Frontier Review 3 本、Review Article 4 本、Regular Article 85 本、Short Communication 15 本、Letter to Editor 35 本の計 142 本であった。

それぞれのジャンルにおいて海外からの投稿が増加しており、PCN が掲載した論文の中でわが国からの比率は、PCN Frontier Review 66 %、Review Article 25 %、Regular Article 46 %、Short Communication 60 %、Letter to Editor 60 % であった。Regular Article と Review Article についてはわが国からの掲載論文は半分以上となった。

PCN では掲載される何倍もの数の投稿論文を査読している。一年間にお世話になった査読者数は 335 人に上る。論文の査読は、自分が論文を執筆する以上に時間と気遣いを必要とする作業であり、適格な査読があって初めて質の高いジャーナルの運営が可能であることは言うまでもない。この場を借りて、査読をご担当いただいた多くの先生方に感謝申し上げたい。PCN では投稿数の増加に伴い、今まで以上に数多くの専門家に査読をお願いしたいと考えている。PCN が質の高い学会英文誌として成長し続けていくためには多くの会員のご協力が必要であることを申し述べてご理

解を得たい。

Regular Article

1. How the psychiatrists of a mental health department managed their patients before an attempted suicide

Paolo Scocco, Elena Toffol, Elisa Pilotto, Pertile Riccardo, and Luigi Pavan

Department of Mental Health, Padua University, Padua, Italy

自殺企画者の特性とメンタルヘルス科における精神科医による自殺の予見性について

【目的】イタリア北部のメンタルヘルス科に自殺企画にて受診した患者の特性を調べ、その対応について調査することを目的とした。【方法】上記施設の精神科医にアンケート調査を行った。

【結果】12 カ月間に 166 名の自殺企画者の受診があった。このうち 66 名 (40 %) の患者には、過去 2 年以内に受診歴があり、63 名についてその記録が残されていた。29 名 (46 %) は気分障害、26 名 (41 %) は人格障害、11 名 (18 %) は統合失調症と診断されていた。34 名は、精神科病棟から退院後 1 年以内の自殺企画であり、その大部分は 3 カ月以内であった。診察医からの回答では、63 名中 38 名 (60 %) には最後の診察時になんら異変を認めていなかった。63 名中 41 名 (68 %) は直近の自殺の危険性を考えておらず、45 件 (75 %) の自殺企画は予見不可能とされた。回帰分析によっても自殺企画を予見する因子を見出すことはできなかった。【結論】精神科医による最終診察において自殺企画を示唆する変化は気づか

れることは困難であるとともに、精神科医の大部分は、疾患に関わらず、自殺企画の予見は難しいと考えていた。

2. Zarit Caregiver Burden Interview: Development, reliability and validity of the Chinese version

Lu Lu, ms, Lie Wang, ms, Xiaoshi Yang, and Qiaolian Feng

Department of Social Medicine, School of Public Health, China Medical University, Shenyang, China

中国語版 Zarit Caregiver Burden Interview の開発と信頼性および妥当性の検討

【目的】中国における介護者負担を評価するための尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討する。【方法】China Medical School の第一および第二附属病院と Tiefsa Coal Industry Group 病院において Zarit Caregiver Burden Interview 中国語版を施行した。【結果】523 名の介護者について検討した。中国語版尺度の Cronbach 係数は 0.875 であり、内部一致率は高く、各項目と全体との相関はいずれも統計学的に有意であった ($P < 0.01$)。因子分析では 5 個の因子が抽出され、この 5 因子により結果の大部分がよく説明されていた。【結論】中国語版 Zarit Caregiver Burden Interview は十分に信頼性と妥当性を有しており、中国における介護者負担の評価に使用可能である。

3. Factors predicting transferal after psychiatric emergency management in the elderly

Chieh-Hsin Lin, Chao-Wen Hsu, Ching-Yun Teng, Platinum Po-Chun Sun, Heng-Chia Hsu, Yu-Ting Wung, and Ching-Hua Lin

Kai-Suan Psychiatric Hospital and Department of Surgery, Kaohsiung Veterans General Hospital, Kaohsiung, Taiwan

精神科救急を受診する高齢者について総合病院へ

の紹介を規定する因子について

【目的】本研究では、精神科救急を受診する高齢者と若齢者の特性の違いを明らかにし、総合病院への紹介を必要とする高齢者を特徴づける因子を明らかにすることを目的とした。【方法】4 年間の精神科救急の受診者を調べて、65 歳以上の者を高齢者として区分した。受診者の特性について、非連続変数については χ^2 -test を、連続変数については t -tests を用いて解析し、多重回帰分析により総合病院への紹介が必要な高齢者症例を特徴づける因子について解析した。【結果】4 年間の精神科救急受診者 (243 名) のうち高齢者は 3.4% であった。高齢者の受診回数は 1~7 回まで、平均 1.63 ± 1.18 回であった。精神科救急を受診する高齢者については、一般年齢と比較してもいくつかの特徴があった。総合病院への紹介を必要とした高齢受診者には、高齢 (odds ratio = 1.32)、以前の精神科受診回数 (odds ratio = 1.42) の特徴があった。また、思考形式に異常を呈さない高齢者は総合病院に紹介される比率が高かった。【結論】精神科救急を受診する高齢者は特別な特性を有しており、このような患者への対応には特別な考慮が必要である。

4. Resting state default-mode network connectivity in early depression using a seed region-of-interest analysis: Decreased connectivity with caudate nucleus

Robyn Bluhm, Peter Williamson, Ruth Lanius, Jean Théberge, Maria Densmore, Robert Bartha, Richard Neufeld, and Elizabeth Osuch

Department of Psychiatry, University of Western Ontario, Schulich School of Medicine and Dentistry, Ontario, Canada

初期うつ病患者における安静時脳活動の異常——尾状核との結合性の低下——

【目的】健常者における安静時の脳活動について default-mode network (DMN) があること、そしていくつかの精神疾患において DMN に差

異があることが報告されているが、これまで、投薬前のうつ病患者における安静時 DMN を測定した報告はない。そこで、本研究ではうつ病を主訴として受診した患者について安静時 DMN を評価した。【方法】14名のうつ病患者と15名の対照者について、fMRI (4T) により安静閉眼時 DMN の評価を行った。1名以外はすべて未投薬であった。precuneus/posterior cingulate cortex (P/PCC) 領域における seed region connectivity analysis により DMN を評価し、うつ病に特徴的な変化の有無を検索した。【結果】後部帯状回 (PCC) 領域の解析によりうつ病群、対照群ともに DMN が同定された。うつ病群では対照群との直接比較により、PCC と両側尾状核の相関が減少していたが、うつ病群において健常群と比較して相関が強い部位を認めなかった。【結論】うつ病初期における安静時 DMN を評価した最初の報告であるが、うつ病患者群では、動機づけあるいは報酬系に関連するとされている後部帯状回と尾状核とのつながりが低下していた。尾状核における DMN 結合性の低下は大うつ病の初期徴候と考えられる。

Short Communication

1. Impact of seizure duration in maintenance electroconvulsive therapy

Jan Di Pauli, and Andreas Conca

Task force for Special Treatment Modalities in Psychiatry of the Austrian Society of Psychiatry and Psychotherapy, Rankweil, Austria

維持 ECT 療法におけるけいれん持続と有効性について

急性期 ECT 療法は抗けいれん効果があることは広く知られているが、本研究では維持 ECT 療法の抗けいれん効果についての検討を目的として、維持 ECT 療法を受けた患者について後方視的にそのけいれん持続時間の変化を検討した。患者を有効であった者と有効でなかった者とに区分すると、有効であった者では、維持療法の最初の1週間でけいれん持続時間の有意な変化を認めなかった。対して有効でなかった者については最初の1週間でのけいれん持続時間が増加していたことから、維持 ECT 療法の初期における一定のエネルギーのもとでのけいれん持続時間の増加は再発を予見する知見と考えられる。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)